

# 現行のロールシャッハ・テストへの 方法論的懐疑（その2）

田 澤 安 弘

## 現行のロールシャッハ・テストへの方法論的懐疑（その2）

田澤安弘

もくじ

- I. はじめに
- II. 解釈に理論は無用か
- III. 感覚と件論を超えて
- IV. 解釈はいつ始まるのか
- V. 法則定立的方法と個性記述的方法
- VI. 情報収集モデルと治療モデル
- VII. まとめと方向性
- 注釈
- 文献

### V. 法則定立的方法と個性記述的方法

(本論は、「現行のロールシャッハ・テストへの方法論的懐疑」の後半部分を収録したものである。)

Exnerは、ロールシャッハ・テストを「個人差のテストである」(Exner, 1994)と規定して、「ある人物についての記述が、科学的法則に基づいた結果と個性記述の結果の両方から引き出されたものであるということが、ロールシャッハ独自の特徴である。だからこそ、ロールシャッハはその個人の唯一無二性をつかむことができる」(Exner, 2000)と述べている。たしかに、臨床家の到達すべき地点は、クライアントの個別性・特殊性・固有性について理解することであるのかもしれない。だが、レポートの作成を目的とするかぎり、現実の個性は無化されてしまうことになるのではあるまいか。というのは、クライ

エントのパーソナリティ像が「～は～である」という命題に形成されるということは、ロールシャッハ状況においてははじめに保持されていた感性的直観（直観的個別事実）が度外視され、現実から疎遠になった抽象化を目指すことに他ならないからである。

レポートの用語が抽象的であるから個別性を表現できない、という側面もあるのかもしれない。Kleiger (1992a) がいうように、包括システムの「要求刺激」などの「認知的メタ心理学的ジャルゴン」や、非個人的な諸力や諸構造を表わす抽象的言語としての「精神分析的メタ心理学的ジャルゴン」は、クライアントを具体的に理解するためには不必要かつ不適當である。しかし、問題はそれだけではない、法則定立的方法である心理測定法は、クライアントの個別性を捉えることができるのであろうか。

臨床心理学の世界では、Allport, G.W. (1937, 1938) 以来、一般法則の発見を目的とする「法則定立的 (nomothetic)」アプローチと、個別事例の唯一無二の特質を徹底して研究する「個性記述的 (idiographic)」アプローチのふたつに、パーソナリティ・アセスメントの方法を区別するのが一般的である。ロールシャッハ・テストの量的分析は前者として、質的解釈は後者として、それぞれ捉えることができるであろう。そして、このような考え方は、自然科学的手続きとしての法則定立的方法ないし一般化的方法と、歴史的手続きと

しての個性記述の方法ないし個性化的方法を区別し、自然科学的な概念形成（類概念）と歴史的な概念形成（個体概念）、それから「常住不変なるもの（das Immergleiche）」と「一回的なるもの（das Einmalige）」との対立から出発する、Windelbant, W. (1894) や Rickert, H. (1898) の哲学にまで遡ることが可能である。

個性記述的な方法と法則定立的な方法の違いは、次の Poincaré, H. (1902) のたとえ話によって理解されるであろう。つまり、一回的な特殊的・歴史的な事実を重視する歴史家は「事実だけが重要である。John Lackland（土地のないジョン・ラクランド王）はここを通過した。賛嘆すべきことがそこにある。私が世界の全理論をそのために投げうってもと思うひとつの実在がそこにある」と述べ、普遍法則を重視する物理学者は「John Lackland はここを通過した。そんなことは私にはどうでもいい。その人がそこを再び通過することはもうあるまいと思われるからである」と述べるわけである。

Cassirer (1910) は、Rickert の法則定立的な自然科学的概念形成の理論について、「思惟の『概念』に向かう方向と現実に向かう方向とは、そこでは互いに排訴しあっている。というのも、概念が自らの課題を実現するにつれて、直観的個別事実の領域はますます後退していくからである」と述べている。法則定立的方法におけるすべての概念形成は現実の個性性を無化し、それと引き換えに、「事物の自然法則的必然性への洞察」を得るというわけである。Rickert にとって、現実を概念的に理解することは、「現実固有の基本的内実を消し去ることと同じ」であり、概念は、個別的事実の条件を捨象して表象される「共通なるものの表象」つまり「ただ漠然たる類表象（Gattungsbild）の普遍性」を指向するにすぎない。

法則定立的方法がクライアントの生きた個

別性を捉えることができないのは、こうした個別事実の後退によるだけではない。われわれが臨床場面で法則定立的な方法によってアセスメントを行うことにはどんな意味があるのか、もう少し考えてみよう。

クライアントも、臨床家も、個別的な欲望や嗜好を持った個人である。そして、客観的な心理測定法は、そのような擬人的要素を排除すると同時に、臨床家の個別的感情の感性的内容（印象の個人的特殊性やその内的異質性）を除去して、万人に共通するある類的構造や諸特性を測定しようとする。それによって測定された「あらゆる個別は、全体に対するその位置を示す添字を伴い、この指標にその対象的価値が刻印されている」（Cassirer, 1910）ことになる。クライアントはある特性において数値化され、一義的な秩序をなす固定した座標系の中に位置づけられることによって、はじめて他よりも～であるという比較が可能となるのである。

ロールシャッハ・テストに関して、Sugarman, A. (1991) は、「テスト・サインを臨床上の特徴と結びつけた定量的調査研究の結果にのみ基づいて推論を行うことは、MMPI のような客観的テストに歴然としている数理的かつ非個人的なアプローチと何ら変わらない。このようなアプローチに依拠したレポートでは、個人のパーソナリティ構造に備わる唯一無二性や固有性を理解することなど、ほとんどできない」と述べている。なるほど、法則定立的な方法による「注意の焦点づけが及ばない観念活動は平均的な水準にある」という陳述は正確には違いないが、それは臨床にはほとんど「関連性がない」し、「彼女は怒りっぽい人である」という「特性—心理学」による陳述も、「特性等価的行動（traitlike behavior）を生み出す、根底にあるダイナミクスについて何も語っていない」（Smith, 1997）のである。

客観的テストが個別性を捉えることがで

きないのは、「個人差」が「個別性」とは異質の概念であるからに他ならない。Smith (1994) がいうように、法則定立的な「テスト (testing)」は個人間の比較が問題であり、「アセスメント (assessment)」は個別的パーソナリティの全体的布置のなかでデータを理解するという意味で、あくまで「個人内の比較 (intra-individual comparisons)」が問題なのであって、個人差は前者に、個別性は後者に、それぞれ属する概念なのである。

われわれが用いる心理学的な尺度とは、諸要素を比較して順序づける観点が理論的に確立され、実証的に基礎づけされたものである。具体的印象としての感性的な質が、「系列形式をした規定に翻訳されることによって」心理学的対象となるわけであるが、ロールシャッハ状況におけるクライアントの言語表現は、「諸性質の総和」から「何がしかの比較尺度に関して定められる値の数学的総和となる」(Cassirer, 1910)。言い換えれば、尺度とは「所与を系列において捉え、その系列のなかでそれらにきまった位置を割り振るための」手段であり、それによって変換された値が帰結するのは、「ある全体系のなかに一義的に規定された位置を定めること」(Cassirer, 1910) である。Cassirer (1910) がいうように、「われわれがある物理学的対象ないしは事象を規定する一定の数値とは、普遍的な系列関連への秩序づけ以外の何ものをも語っていない。個別の定数は、それ単独では何の意味ももたない。その意味は、他の値との比較および判別的統合によってはじめて確定される」のである。

このように理解すると、ロールシャッハ・テストの量的分析を含めて、法則定立的な心理測定法一般が目論むのは個人間比較であるということであり、そのようなわけで、パーソナリティの個別性を捉えることができないということになる。では、個性記述的な質的解釈によるのであれば、われわれは特殊・個

別的なパーソナリティを捉えることができるのであろうか。答えは、否である。というのは、「歴史学的な概念もまた、一般に、多かれ少なかれ、強い抽象の産物であり、したがって、そのものとしては自然科学の概念が直観的でないのと同じくらいに、直観的でない」(Cassirer, 1910) からである。われわれは、このように「静的な『個性記述的』対『法則定立的』のような瘦せた概念」(中井, 1990) に依拠しているかぎり、個別的なパーソナリティを捉えることはできないのである。

ある人物についての記述が、法則定立的方法と個性記述的方法の両方から引き出されることにロールシャッハ・テストの独自性があり、だからこそロールシャッハ・テストは、その個人の唯一無二性をつかむことができる、というのがExnerの論旨であった。しかし、これまで二つの異なる方法論について検討を加えてきたことから理解されるであろうが、彼の主張には根拠が見出せない。これまでのロールシャッハ・テストは、あくまで異なる方法論を無頓着に併用してきただけなのであって、両者が統合されたものであるとはいえない。つまり、ロールシャッハ・テストにおける量的分析と質的解釈は、「それぞれがまったく異なった科学の世界で営まれるので、原則として互いの誤りを証明することができないし、矛盾することもない」(Andronikof-Sanglade, 1995) といえるだけであって、方法論を併用すればその個人の唯一無二性をつかむことができるなどとはいえないのである。異なるパラダイム間の「通約不可能性 (incommensurability)」については、Kuhn, T.S. (1970) が論じている。

このように、法則定立的方法と個性記述的方法はそれぞれ異なった論理的次元にあるので、ロールシャッハ・テストの量的分析と質的解釈の結果のあいだには何の矛盾も対立も生じることはない。それゆえ、一方を他方に一元化することは、原理的に不可能である。

われわれが目指すのは、これら兩者の間である。すなわち「われわれに求められているのは、主観を客観化することなく主観のまま『非合理的』に、しかも『科学的』に思索するという、困難な途である」(木村, 2005)ということである。

具体的にいえば、それは「事実を超えた仮説を検証するためではなく、事実そのものにある内的意味を与えるために「現象の内具的性格の分析」に入り込んで、「ただひとつの症例を徹底的にさぐり、諸症状を内的につき合わせようとする」(Merleau-Ponty, M., 1988) ものである。言い換えると、計量的知識によってクライアントを普遍的な系列関連の秩序のうちに客観的(数量的)に位置づけるのではなく、ただ一人のクライアントの内在的な反応の分析に専念するということである。さらにいえば、次の木村(2001)のようになるであろう。

『『患者の全体』は、患者の個々の言表の『全部』を残らず寄せ集めてみても得られない。患者の全体はむしろ患者の個々の行為、個々の言表のすべてに宿っている。『全部』は個別を含むけれども、『全体』は個別に含まれる。しかしたった一つの個別から単刀直入に全体を直観する名人芸はさておいて、一般には全体の把握に至るために個別についての多数の経験を重ね合わせる作業が必要となる」

経験の全体は、個々の感性的所与のたんなる総和ではない。われわれには、「個別と全体とのあいだの『解釈学的循環』の中に身を置くこと」(野家, 2001)、すなわち行為的直観が必要である。だがその直観は、経験の全体を一気に「踏み越える(uberschreiten)」ことではなくて、「規則的な歩みにおいて通徹する(durchschreiten)」(Cassirer, 1910)ことである。そして、個別性と内性を越えた普遍性と超越性は、他の値との比較によ

て「もの」としての個別の定数を確定するような客観性に求められるのではなく、個別事例に関する経験の蓄積と、臨床家各自にとって観察可能な「こと」を記述する間主観性に求められる。内在的であると同時に超越的であり、個別的であると同時に普遍的でもあるようなアプローチが、木村(2001)のいう方法論としての「臨床哲学」である。

たんなる個性記述の方法であれば、いまここで何が起っているのかという、ある出来事の個別的な意味が重視されるであろう。つまり、他の誰でもない「この私」が、特定の地点と瞬間において体験する意味が重視されるのである。それに対して、法則定立の方法であれば、個別的な出来事そのものではなく、出来事が生起する諸条件が探究されることになる。つまり、同じ出来事がいつでもどこでも誰にでも観察可能であるような一定の諸条件や、諸条件の変化に応じて出来事がどう変わるのかが探究されるのである。

われわれがクライアントの個別性を捉える際には、いまここで何が起っているのか、それについて知る必要があるのはいうまでもない。では、一回的な出来事の意味にとどまらず、出来事の反復やその生起を左右する諸条件について探求する必要はないのであろうか。通常われわれは、直接的に知覚されたり直観されたりしたもの、つまりいまここに与えられている個別的存在に繋ぎとめられている。われわれがそうしたいまここの感覚に固執してそれを超越しないのであれば、つまりたんなる感覚の所与性にとどまるのであれば、それは意識に与えられた事物しか実在として認めない、いわゆる現象主義にとどまるのではあるまいか。

われわれに求められるのは、そうした対立しあう二元性を互いに結びつけ、相互浸透させることである。つまり、クライアントの個別性を反復可能性の相のもとに見て取り、類似する出来事の反復のうちに現われる規則性

のうちに、個別のかつ特殊的な出来事を組み入れるということである。あるクライアントとのあいだで生起し、さまざまに変容する現象からひとつの共通した意味、つまりパターンを抽出することによって、そのつどの個別のものの中に、クライアントのパーソナリティ全体の表示を見て取るのである。簡潔に言えば、法則定立的方法と個性記述的方法という二分法を拒絶するということは、個別的内容を論理的に分節化し、その内容を分節化した全体のうちに秩序づけることなのである。

われわれが臨床場面で行っているのは、あるクライアントと他のクライアントを比較する、法則定立的な個人間比較ではない。われわれは、一人の個別的なクライアントと治療的に関与しながら、個人内比較によってそのつどパターンを発明するのである。けれども、あるクライアントの個別的な同一性の定立は他のクライアントとの区別のうちで行われ、他のクライアントとの区別はそのクライアントの個別的な同一性の定立のうちで行われることに疑いはない。もしもそれがなければ、われわれは個性記述的方法のようにパーソナリティにおける「内在」ないし「個別性」のみ扱い、「超越」ないし「普遍性」には無頓着であるということになろう。

もちろん、いま目の前にいるクライアントと他のクライアントたちとの比較は、一義的な秩序をなす固定した座標系を用いてなされるのではない。では、どのようにして行われるのだろうか。おそらくそこには、個別事例に関する臨床家の経験の蓄積が絡んでいるはずである。

われわれ臨床家とクライアントとの関係は、「存在的-実在的な関係ではなく、シンボリック関係」(Cassirer, 1929) である。つまり、「単なる知覚においてさえもすでに、それはけっして直接与えられているものではなく、知覚を介して表示されているにすぎず、

知覚において『表出 [=代理] レプレゼンツイーレン』されているにすぎない」(Cassirer, 1929) のである。このように考えると、臨床家の経験はその身体に歴史性として蓄積され、そのようにして蓄積された多数の個別事例との経験を地として、その上にいま目の前にいるクライアントが図として現われると理解されないであろうか。言い換えると、あるクライアントとの関係においてその個人内に内在する固有の部分的パターンは、その人のパーソナリティ全体を地としてそのつど姿を現わすだけでなく、その臨床家にとっての他のクライアントたちとの経験を地として、その上に図として姿を現わすのである。

では、われわれが指向すべきアプローチにおいては、量的分析はどのような位置づけを得るのであろうか。Smith (1997) は、包括システムを精神分析的アプローチに取り入れる立場をとっている。彼は包括システムに基づいてプロトコルをコード化し、構造一覧表を利用して構造的変数を考察することから解釈を始めるのだが、構造的な変数と物語的なデータとのあいだを往復することによって両者は統合されるのだという。

以前の彼 (Smith, 1991) は、理論に基づかない量的分析を構造的データに適用し、精神分析理論に基づく質的解釈を反応内容に適用するような立場に対して、「作話的結合も同然である」と批判していた。認識論的な矛盾を考慮せずに、安易に統合をはかる立場に、批判的であったのである。このことは、「異なるアプローチから派生する異なった哲学的意味合いと理論的意味合いが与えられるのならば、同一人物に関する一組のデータに一方のモデルを、もう一組のデータに他方のモデルを当てはめるだけなら、それは解釈的な意味をなさない」(Smith, 1994) という言葉にも現われている。

だが、Kleiger, J., and Peebles-Kleiger, J. (1993), Kleiger, J. (1997, 1999), Ivanouw, J.

(2000) のような、経験主義に由来する構造的データの心理学的意味に対して精神分析的に、あるいは現象学的に接近し得るとする立場が現われることによって、彼は考えを前進させて、次のように述べている。すなわち「私は、量的データをその他すべての観察される現象と同様に扱い、精神分析的に解釈することを提案する。つまり、従来の経験主義に由来する特殊なスコアや布置の解釈は、最終的な陳述とみなされるべきではないということだ」(Smith, 1994)である。具体的にいえば、以下になるであろう (Smith, 1994)。

「たとえば対象関係論の観点からすると、多量の人間部分反応は、対象恒常性の欠如を示唆したり、みずから責任を負う独立したセンターとしての他者と関与するのではなく、自分の特定の欲求を満足させたり挫折させたりする部分-対象としての他者と関与する傾向のあることを、示唆したりする。クライン派の観点からいえば、その人が一次的には投影の防衛機制が優勢な妄想的-分裂的態勢から対人関係を営んでいることを、さらに推測することができるであろう」

彼は一体ここで何をしているのであろうか。このアプローチが行っているのは、プロトコルのあるがままの秩序ではなく、質的な分類としてのコード化を経て数値に変換された、構造一覧表としての秩序を精神分析理論によって解釈するということである。彼にとっては、コード化された記号や構造一覧表の数値は、さらに解釈されるべき抽象的なシンボルなのである。簡単に言えば、こういうことになるかもしれない。すなわち「対象をその一群の数値的諸定数に分節することは、評価の新しい特有の範疇を導入する」(Cassirer, E., 1910) ことになるということである。彼は、数値化された構造一覧表という全体をある一定の理論的観点にのっ

分節化し、それを組織的に整序しているのである。

このようなことが可能となる理論的前提は何なのであろうか。われわれは個別のクライアントと関与するわけであるから、もしも数値化によって個別性が失われるのであれば、量的分析は端的に放棄されるはずである。クライアントのロールシャッハ反応はある要素的特性において数値に変換され、要素間に想定される全体的連関すなわち構造一覧表のうちで捉えられるわけであるが、そうすることによって、その個性は失われてしまうのであろうか。

Cassirer (1910) は、一定の数値的定数の値が「一般的法則の諸公式のなかに代入されてはじめて、経験の多様は『自然』に刻印されるかの確実で一義的な構造を獲得する」ことになるが、その特定の数は「複数個の標本に含まれる普遍的な類概念」として存在しているのではない、と述べている。もちろんそれは感性的な存在ではなく、純粋に概念的な存在であることに疑いはないが、たとえば「2とか4とかは、具体的な二個ないしは四個のすべての対象において実現されている類として」実在しているのではなく、「単位が指定された列における定められた項として、ただ『一回』かぎり存在している」のである。したがって、「科学的概念が個別のものを、もっぱら順序づけられた集合の特殊の要素としてのみ捉えるからといって、科学的概念にとって個別の確立が否定されているのではない」のである。

次に、Smithの方法がどうして異なる方法論の無頓着な併用とは違うのか考えてみたい。法則定立的方法、つまり「物体の科学、そしてまた他のすべての自然科学が追求する最終目標は、その概念内容から経験的直観を遠ざけることにある」(Cassirer, 1910) のだが、彼の手法では、クライアントの個性が抽象的な概念へと希薄化されるのではなく

て、むしろ反対に濃密化されているように思われるのである。

Cassirer (1910) は、次のように指摘している。すなわち「普遍的になればなるほどそれだけ直観的な厳密さと明晰さとが失われ、ついには真に現実的な内実のない単なる図式にまで萎縮してゆくということは、『表象』についてのみ語りうることであって、他方『判断』は、個別を比較と対応づけのより広い範囲内に関係づけるに応じて、それだけ精確に個別を規定する」である。形式化が発展するほど個別の固有性もいっそう際立ってくるという結論であるが、このような結論を導くことができるのは、判断が「その『使用』においては、それが体系的形式を与えようとするこれらの印象の全体とあらためて関連づけられる」からである。「思惟が直観から身を離すのは、もっぱら新しい独立した補助手段によって直観に回帰し、こうして、直観をそれ自身において豊かにするため」であり、抽象するということは、現実の存立を変えるのではなく、そこに一定の枠づけを措定するだけなのである。

このように考えると、われわれは、量的分析と質的解釈から導き出された結果を、具体的な解釈行為における直観において統合することができるといえるであろう。法則定立的方法への一元化では直観が排除されてしまう。個性記述的方法への一元化では（一過性の意味はともかくとして）超越的な意味（パターン）が排除されてしまう。また、いずれの方法によっても、直観から遠のいた浅薄な図式に到達するにすぎない。われわれは、臨床家の生きた行為という視点から、方法論について見直す必要があるのである。

## VI. 情報収集モデルと治療モデル

そもそもどうして心理テストは必要なのであろうか。研究を目的とする場合はともかく

として、臨床場面でクライアントに心理テストを実施することには何か意義があるのだろうか。

1951年に出版された『クライアント中心療法』のなかで、Rogers, C.R. (1951) は「われわれは体験を通して、心理力動の診断は不要であるばかりでなく、ある意味で有害あるいは賢明ではないという暫定的な結論に達している」と述べている。これが、彼の有名な心理診断不要論である。その主たる理由は、評価の位置が臨床家の側に置かれてしまい、それによってクライアントの依存傾向が助長され、状況を理解して改善する責任が臨床家の手にあると思こませてしまうからである。クライアント中心療法ではむしろ反対に、「クライアントが自分の不適応の心因的な側面を診断し、その診断を体験し、さらにその診断を受容できる状況を提供すること」が臨床家に求められるのである。

Rogersの言葉を、半世紀たったいま読むと、とても新鮮に響く。なるほどと思えるのである。心理療法には、治療初期の見立てをしっかりとしなくても、つまり「問題やその問題の因果関係についてまったく知らなくても始められるという側面が少なくともある」ことは、確かなことであると思う。心理療法初期の見立てを強調する臨床家たちは、彼のこのような姿勢を、臨床家として無責任だと非難するのであろうか。

だが、Rogersを非難する前に、当時の、あるいはそれ以前の、心理診断の実態について知っておく必要があるのではないだろうか。Rogersにそう言わしめた、当時の心理診断についてである。米国最初期の心理臨床家であるJessie Taftは、おそらく1920年代のことであろうが、当時を回顧して次のように述べている。すなわち「強く望んではいたものの、自分には他の人たちを援助するための基礎がないことは分かっていた。子どもの心理テストが有用であることは百も承知して

いるが、それは治療的なものではなかった」(Taft, J., 1958) である。

おそらく当時の心理診断は、クライアントに対して一方的に実施されるだけで、その結果が話し合われるようなこともなかったのであろう。やりっぱなしである。あるいは、Rogersが批判していたように、臨床家の側が一方的に評価するものであったに違いない。このようなやり方は、臨床家の側には何がしかの役に立つのかもしれない。けれども、クライアントにとっては治療的ではないのである。この文脈でいえば、一方的に見立てばかりを強調する臨床家は、批判されることになるであろう。

ここまでは心理テストを用いたアセスメントと、面接などによるアセスメントを区別しないまま論じてきたが、心理テストを用いたアセスメントに関していえば、われわれはTaftの時代から何か進歩したのであろうか。やりっぱなし、一方的なアセスメントがまだ続いているのであろうか。

Finn, S.E. (2007) は、従来のアセスメントを「情報収集」アセスメントと、新たなアセスメントを「治療的」アセスメントと、それぞれ呼んで区別している。前者は、診断、見立て、治療の評価を主たる目的として、クライアントに心理テストを実施するモデルに従ったものである。後者は、心理アセスメントについての臨床家の「態度 (attitude)」のことであり、クライアントのアセスメント体験が肯定的なものになり、クライアントに肯定的変化が生み出されることを願いつつ実施されるものである。

この二つのモデルをさらに詳しく説明すると、以下ようになる (Finn and Tonsager, 1997)。

まず、アセスメントのゴールである。情報収集モデルでは、現存する特性次元とカテゴリーを用いてクライアントを正確に記述すること、クライアントの見立てに役立てること

などが目標である。それに対して治療モデルは、クライアントが自己と他者に対する新しい考え方や感じ方を学ぶこと、クライアントがこうした新しい理解を模索して、日常生活の諸問題につないでいくために役立てることが目標である。

次に、アセスメントのプロセスである。情報収集モデルの流れは、データ収集、テスト・データの解釈、というものである。それに対して治療モデルは、クライアントと共感的なつながりを発展させること、個に即したアセスメントのゴールを明確にするために、クライアントと共同制作的に話し合うこと、アセスメントのプロセス全体を通じて、クライアントと一緒に情報を分かち合って探究すること、というものである。

次に、テストの定義である。情報収集モデルにおけるテストとは、法則定立的に比較することができ、アセスメント場面外の行動を予測することができる、そうしたクライアントの行動の標準化されたサンプルを収集するものである。それに対して治療モデルにおけるテストとは、日常の問題状況への特徴的な反応の仕方についてクライアントと対話する機会であり、クライアントの主観的体験に臨床家がアクセスすることを可能とする、共感のための道具である。

最後に、重視する点である。情報収集モデルで重視するのは、テストのスコア、アセスメントの後になされる見立て、である。それに対して治療モデルは、クライアントと臨床家のあいだに生起するプロセス、クライアントの主観的体験、臨床家の主観的体験、である。

情報収集モデルによってもたらされた大きな弊害は、おそらく心理テストを用いた「アセスメント」と、「心理療法」を区別してしまうことであろう。Weiner (1975) が、アセスメントを実施する臨床家を「たんに情報を収集する人 ([someone] merely obtaining

information)」、心理療法の担当者を「理解することに専念する人 (someone intent on understanding)」と呼んでいるように、評価と理解（心理療法）に世界が分断されてしまうのである。

われわれがいままで行ってきたアセスメントは、Finnの言葉でいう情報収集アセスメントである。そして、それは論理実証主義的な方法論に基づいたものである。それに対して、治療的アセスメントは、心理アセスメントのプロセスそのものがクライアントにとって治療的であるような、一種のブリーフセラピーである。RogersやTaftがいま生きていたなら、一体何というであろう。いずれにせよ、われわれが目指すのは、アセスメントそれ自体がクライアントにとって治療的であるような、Finnのいう治療的アセスメントの姿勢である。

## VII. まとめと方向性

最後に、いままで述べてきた現行のロールシャッハ・テストに認められる方法論的諸問題について、「反応過程に関わる問題」「解釈過程に関わる問題」「量的分析と質的解釈に関わる問題」という三つの視点から整理する。ロールシャッハ・テストは、そもそものはじめから、異なる方法論を無頓着に併用するアセスメントの道具であった。これまでの歴史のなかで幾度となく存続の危機を迎え、いまは、論理実証主義的な包括システムが主流となって生き残っている。だが、そうした法則定立的な方法論であれ、反対に個性記述的な方法論であれ、もはやわれわれは方法論の問題に無自覚であることはできないのである。

### 1. 反応過程に関わる問題

論理実証主義的な方法論の立場では、クライアントの反応過程が感覚与件論の枠組みのなかで理解されている。これは、クライエン

トの生きた現実を反映していない、原子論的な世界観を背景とするものである。また、詳しく検討は加えなかったが、個性記述的な方法論の立場では、たとえば、クライアントがインクプロットに対して個別的な思考内容を投射するものと考えられている。

たしかに、クライアントの個々の反応は、そのつど思考が優位になったり、知覚が優位になったりするものであろうが、本来的に言ってインクプロットを「見る」、あるいはインクプロットをそれとは別の何か「として見る」体験は、クライアントにとってはなかば知覚であり、なかば思考でもあるようなものであるはずである。また、クライアントはインクプロット、つまり全体としてのゲシュタルトをなしている「色の形」を（たとえば）「コウモリ」として見るのであって、要素的な「色」や「形」のモザイクから成り立っている感覚与件+解釈という二段階の知覚を経て、はじめて「コウモリ」を見るのではないのである。

われわれに求められるのは、そのような知覚と思考の二分法を超えた、あるいは知覚の二段階仮説を超えた、新たな反応過程論である。クライアントの体験に即していえば、インクプロットに何かを見るということは、文字通り「閃く」ということであろう。知覚と思考に分けて考えるのは、あくまで臨床家の側の理論にすぎないのであって、クライアント本人の体験は、知覚と思考への分断を超えた、インクプロットをそれ以外の何か「として見る」というひとつの行為に他ならないのである。このような反応過程論にうってつけなのは、たとえばWittgenstein, L. (1953)の「アスペクト知覚」論なのかもしれない。

また、感覚与件論に依拠する限り、われわれはインクプロットの色や形といった部分的な諸要素から出発することしかできない。部分から全体へのモザイク的豊饒化である。しかし、クライアントが実際に生きているのは、ロールシャッハ状況という現実である。ひと

つの反応が形成される過程を現実に即して考えるのであれば、われわれは、クライアントと臨床家が二人で創造するロールシャッハ状況という全体的な場から、個別的な反応がその部分としてそのつど分節化するさまを、光学的なレベルも含めて描出する必要があるだろう。つまり、われわれに求められるのは、ロールシャッハ・テストの包括的な場理論である。

以上を要約すれば、科学の解釈学の立場から提出されるべき新たな反応過程論は、従来の感覚与件論とは正反対の、クライアントの「として見る」という行為に即した、包括的な場理論である。

## 2. 解釈過程に関わる問題

論理実証主義的な方法論の立場では、クライアントと臨床家が実際にやり取りするロールシャッハ状況は、あくまで事後的に解釈されるデータを収集するための場にすぎない。相互作用によって、あるいは理論的先入観によって汚染されていない、純粋無垢のありのままのデータを収集することが目指されるのである。

このようにして帰納法的な、あるいは実験的な実施法によってロールシャッハ・テストが施行されることによって、そこからはクライアントと臨床家との「出会い」が捨象されてしまうことになる。また、ロールシャッハ状況がクライアントと交流する場ではなくなり、評価（診断）のための「アセスメント」、理解（治療）のための「心理療法」という、抜き差しならない分断が発生してしまうことにもなる。これが、私のいう「臨床場面の空洞化」である。

ロールシャッハ状況が心理療法の場面と異なることは確かなことである。クライアントの葛藤がロールシャッハ状況で話し合われるようなことは、極めてまれであろう。だが、われわれに求められるのは、心理療法場面と同様に、ロールシャッハ状況においてもクラ

イアントとの出会いを大切にする態度である。そして、論理実証主義的な方法論のように事後的に解釈を始めるのではなく、ロールシャッハ状況からすでに解釈を始めることである。

もちろん、これだけで終わってしまうのでは、情報収集モデルによるアセスメントと大差ない。アセスメントの全体的なプロセス、つまり受理面接、心理テストの実施、結果の話し合いという一連の流れのなかにロールシャッハ・テストを位置づけ、そのプロセス自体がクライアントにとって治療的なものになるように配慮する必要があるのだ。そのためには、従来の直線モデルを超えた、アセスメントの全プロセスを包括するような、新たなモデルを提起することが求められるであろう。

次に、解釈に理論は必要なのかという問題である。論理実証主義的な方法論では、臨床家には純粋無垢なデータが与えられ、それを記述するだけでよいので、理論は無用である。けれども、臨床家の生きた現実に即していえば、与えられる観察事実はすでに何らかの理論を背負って解釈されたものである。われわれに求められるのは、臨床家の解釈過程において、ボトム・アップ的な帰納的・分析的推論過程と、トップ・ダウン的な演繹的・総合的推論過程は、分かちがたい解釈学的循環を形成しているのだということを忘れないことである。

このような解釈学的循環のうちに、臨床家はクライアントに固有のパターンを発明する必要がある。法則定立的な方法ではクライアントの生きた個別性と臨床家の直観は排除されてしまう。個性記述的な方法では、普遍法則や出来事が生起する諸条件の探究が排除されてしまう。われわれに求められるのは、認識の最終段階に直観において、クライアントの個別的な普遍法則としてのパターンを、おのれの行為的直観において発明することである。

以上を要約すれば、科学の解釈学の立場から提出されるべき新たな解釈過程論は、アセスメントそのものが治療的であるという意味で従来の直線モデルを超えていると同時に、アセスメントの全プロセスを統一的に理解することのできる、包括的モデルである。加えて、そのつどの解釈過程における解釈学的循環が意識され、クライアントに固有のパターンを行為的直観において捉えることのできる、そうした質的解釈のための具体的な手法が提出される必要があるだろう。

### 3. 量的分析と質的解釈に関わる問題

ロールシャッハ・テストにおいて量的分析と質的解釈を無頓着に併用するということは、両方の異なるパラダイムから等しく距離を置いていることを意味している。けれども、そのような中立的態度など実際にはあり得ないのではあるまいか。われわれが常に一定の立場にコミットしているからこそ、そのパラダイムのもとに秩序をなす世界が現われるのであって、そのような一定のパラダイムを指向する態度がなければ、世界は秩序化さえされ得ないのである。質と量は「並存」するのではなく、このように「転換」するのである。言い換えれば、二つのパラダイムは連続しているのではなく、断続の相において捉えられるといえるであろう。

法則定立的方法と個性記述的方法、あるいは論理実証主義と解釈学という方法論のもとに、世界は二つの秩序として分節化する。そして、自然科学と精神科学を横断するような知識を実践的に獲得しようとするのが、野家の「科学の解釈学」である。それは方法論的な多元主義であり、唯一無二の科学の方法を否定するものであるが、何でもありという相対主義的な姿勢ではなく、方法論的なひとつの選択なのである。彼はこう述べている（野家, 1993）。

「今一度繰り返せば、異なるパラダイムを理解するためには、われわれはそのパラダイムにコミットする必要もなければ、またあらゆるパラダイムの外部に立つ中立的な傍観者となる必要もない。われわれには、自分が帰属するパラダイムの内部に身を置いて、そのパースペクティブから異なるパラダイムを『解釈』する道しか残されてはいないのである。それは解釈するものと解釈されるものとの『地平』のぶつかりあいであり、そこに生じる衝撃こそが『解釈学的経験』と呼ばれるものにほかならない」

われわれが目指すのは、あくまで科学の解釈学というパラダイムの側に身を置いて、異なる他方のパラダイムを解釈することである。ここには、他方の秩序へと越境して、知の全体性を獲得しようとする姿勢がある。これは、ロールシャッハ・テストにおける数値化された構造的データを、一定の視点からさらに質的に解釈することを意味するであろう。

また、ロールシャッハ・テストにおいて量的に分析された結果は、質的解釈にとって通約不可能であることに変わりはない。しかし、それは理解不可能あるいは比較不可能というかたちで超え難い壁として現われるのではなく、臨床家が営む質的解釈という行為を参照して自己の秩序を形成するための鏡となる。ロールシャッハ・テストによって、論理実証主義と解釈学という異なるパラダイムが統合されたり、融合したりするわけではない。質的解釈によって自明視されることが量的分析の結果とぶつかり合って衝撃を受けることで揺さぶられ、科学の解釈学という一定の秩序のもとに形成されている、臨床家本人のいまあるパースペクティブが変容するのである。

このような意味でいうと、ロールシャッハ・テストには、方法論的な意味での統合的アプローチなどあり得ないであろう。異なるパラ

ダイム同士は、一方における他方、他方における一方として理解されるのみである。論理実証主義的な方法論にしたがえば、ロールシャッハ・テストの質的解釈は放棄されてしまうか、その結果が利用されたとしてもあくまで二の次である（質的解釈は「肉づけ」であり量的分析は「骨組み」であるという比喩が使われることもある）。だが、本論でいう科学の解釈学にしたがえば、実践行為としての質的解釈に主眼がおかれるにせよ、量的分析が放棄されてしまうようなことはない。そこで起こっているのは、一定のパラダイムにコミットしている臨床家の、実践的性格のある生きた直観の秩序が、他方のパラダイムの衝撃を受けることによって統合的に変容するということであろう。もちろん私は拒絶するが、そのことを称して、統合的アプローチと呼ぶものもいるのかもしれない。

「統合」について、さらに考えてみよう。Smith (1994) は、ロールシャッハ・テストにおいては、構造的な変数と物語的なデータとのあいだを往復することによって量的分析と質的解釈が統合されるのだと述べている。彼 (Smith, 1993) が構造的な変数と物語的なデータのあいだを往復するのは、「どのような内的過程が、構造一覧表によって予測される行動を生み出すのであろうか?」と自問しつつ解釈するからであり、このように考えることが「精神分析に由来する仮説のチェックとしても役立つ」からでもある。そして、「両方の方法論から得られた洞察は、ひとつのパーソナリティの記述に、このようにして結合される」のである。

Smithがここでやっている臨床家としての行為は、「さまざまな言説のあいだをとりもつソクラテスの媒介者 (Socratic intermediary)」（Rorty, R., 1979）のようなものであるのかもしれない。彼の記述には、二つの異なる方法論から等しく距離を置いているような中立的態度を匂わせるところ

や、あくまで量的分析の枠組の中で質的解釈を行っているような実証主義的な姿勢を匂わせるところもあるが、基本的にはひとつの立場に身を置いて他方を翻訳しているのである（不一致が調停できない場合もあろう）。だが、われわれにとって「翻訳が可能であることは、そのパラダイムを受け入れて自分のものとすることを意味するものではない。一人の科学者は、同時に二つのパラダイムに属して研究を進めることはできない」（野家, 2008）わけであるから、このような実践行為はパラダイムの統合を意味するのではない。つまり、一定のパラダイムに身を置いて、他方のパラダイムから導き出されることをおのれの理解へと翻訳しているだけなのである。

したがって、科学の解釈学というパラダイムにコミットすることは、方法論的一元化を目論むことでも、異なる方法論の統合的アプローチを提唱することでもない。科学の解釈学という一定の立場に身を置きながら、クライアントとのあいだで（あるいは異なるパラダイムとのあいだで）ソクラテスの媒介者として行為する、臨床家の実践こそ重要なのである。

さて、科学の解釈学に依拠する限り、方法論的には量的分析が放棄されることはないと述べた。しかし、別の理由から、ロールシャッハ・テストの量的分析には慎重な態度を示さなければならないと思っている。というのは、本章で少しだけ触れたが、心理測定法として存立するための重要な基準である、信頼性と妥当性に疑問が投げかけられているからである。

われわれは、ひとつのロールシャッハ・システム全体を構成している諸部分に対する、科学的な立場からの批判を真摯に受け止めて改善していく必要がある。しかし、だからといって、ロールシャッハ・システム全体の否定にはつながらなければならない。必要なのは、「場の内部における再調整 (readjustment)」

(Quine, W.V.,1953) であって、全体の廃棄ではなからう。このように考えると、包括システムの構造一覧表に含まれている指標の中にはいくつか優れたものもあり、それに限って使用すれば何の問題もないのかもしれない。だが、全体的なロールシャッハ・システムとしての包括システムやその他のロールシャッハ・システムを、量的分析を目的として使用するつもりはない。

Smith, B.L. (1997) がいうように、包括システムでさえ、個別事例においては不正確であることがよくある。他のロールシャッハ・システムはなおさらのことであろう。精度の低いテストは、表面が練磨されていない鏡のようなものである。そこに映し出される像は、輪郭の歪んだぼんやりとしたものになるはずである。このような鏡を前にして、どうして身なりを整えることができようか。かりにインクプロット・テストをもっぱらサイコメトリーとして使用するのであれば、Aronow, E., Reznikoff, M., & Moreland, K.L. (1995) が指摘するように、われわれは、そのアキレス腱である反応数がしっかりと統制されたホルツマン・インクプロット法に乗り換えるべきなのかもしれない。

このようなわけで、私はロールシャッハ・テストの量的分析には深入りするつもりはない。その結果を使うとしても、あくまで参考程度にとどめておくのがよいと考えている。その代わり、テストとしての精度の高いMMPI-1 (村上・村上, 1992) を、量的分析のために使用することが多い。つまり、MMPI-1の量的データを、科学の解釈学の立場に翻訳して理解するのである（注釈3）。

以上を要約すれば、科学の解釈学の立場では、方法論的な無頓着によって量的分析と質的解釈を統合したり、併用したりすることはない。異なるパラダイム同士は通約不可能なので「統合」は無理であり、両方の異なるパラダイムから等しく距離を置く「併用」もあ

りえないのである。つまり、この立場での量的分析の使用は、他方のパラダイムを「翻訳」することに他ならないのである。われわれが目指すべきところは、科学の解釈学というパラダイムにコミットしながら、クライアントとのあいだで（あるいは異なるパラダイムとのあいだで）ソクラテスの媒介者として行為する、臨床家の実践を重視することである。

#### 注 釈

1. ロールシャッハ・テストの日本への移入についてである。このテストが日本に紹介されたのは、1920年代後半のことである。はやくは岡田 (1930, 1932) などの研究がある。その後、1940年代から「阪大法」(堀見ら, 1958; 辻ら, 1963), 「名大法」(村上ら, 1959), 「日本女子大法」(児玉, 1958), 「片口法」(片口, 1956) など、日本独自のロールシャッハ・システムが開発されていったが、KlopferやBeckのシステムが踏襲されたものである。Exnerの包括システムは、彼が最初に来日してワークショップを行った1992年以来、エクスナー・アソシエイツ・ジャパンの中村紀子氏などが中心となって広がりを見せている。いま現在、日本には包括システムによるロールシャッハ学会と、それ以外の流派の研究者たちが集結するロールシャッハ学会があり、二つの学会がいわば分裂した状態にあるのが現状である。
2. 言語は実在のアプリオリな分節構造をたんに模写するにすぎないというのが、科学的実在論の考え方である。このような言語観が、包括システムの色彩反応の考え方に如実に現われているように思われる。つまり、色についてクライアントが言葉にしないかぎり、インクプロットの有彩色領域にクライアントが(たとえば)花を見てもコード化しないのである。これは、有彩色領域における色の言語化を基本的に問わないKlopfer, B. et al (1954) や、A-B-C吟味法なる特殊な方法を用いる片口 (1987) とは、随分と違っているように思われる。
3. MMPIの量的分析から導き出される解釈について、ここで言及しておく。MMPIの臨床尺度や高点コード・タイプからは、たとえば主要5因子性格検査のように、一義的な解釈が導き出されるわけではない。つまり、複数の

質問項目によって構成されているひとつの尺度には、さまざまな解釈の意味が附与されているのである。

一例として、尺度 4、つまり精神病質的偏倚 (Psychopathic Deviate) 尺度について、Greene, R.L. (1991) を参考にして検討を加える。50項目からなる尺度 4 によって測定されるのは、全般的な社会的不適応や、心地よい体験など何もないことで、質問項目がすくい取るのは、一般的には家族や権威像に対する不満、自己疎外と社会的疎外、退屈さ、恥ずかしがり屋であることの否認、落ち着きと自信などである。尺度 4 の高得点者は、怒りっぽく、衝動的、表面的で、行動を予測しがたい。彼らは社会との折り合いが悪く、一般的には社会的な規則や慣習を、特に権威像を無視する。権威に対して怒りや敵意を抱いているが、それは顕在化することもあれば潜在したままであることも考えられる。したがって、尺度 4 の顕著な上昇は、反社会的行動や態度が存在することを示唆しているが、必ずしもそれがいつも顕在化することを意味しているわけではない。

このように、ひとつの尺度が一義的な何らかの性格特性を測定するのではなく、それ自体で多様なクライアントの諸特徴を示唆しているのが MMPI である。通常であれば高得点か、低得点の場合のみ解釈されるのだが、Greene (1991) に代表されるように、その他にも「標準」や「中等度の上昇」などに細分して解釈する立場もある。いずれにせよ、MMPI における各尺度の個別の数値は、固定した座標系の中に位置づけられた数学的総和であり、その数値に対応づけられる解釈文 (導き出される解釈) は、生きたクライアントを記述してその行為の意味を理解しようとしたものではない。たとえば、尺度 4 が高得点であれば「他人を信頼できず、自己中心的で、無責任である」という解釈が導き出されるが、この解釈文は、あくまでそうである確率が高い、あるいはこの得点の範囲に収まるクライアントはそう理解できる人が多い、などのように理解されるだけなのである。

## 文 献

Acklin, M.W., and Wu-Holt, P. (1995) Contribution of cognitive science to the

Rorschach technique: Cognitive and neuropsychological correlates of the response process. *Journal of Personality Assessment*, 67(1), 169-178.

Allport, G. W. (1937) *Personality: a psychological interpretation*. Oxford.

Allport, G. W. (1938) Personality: a problem for science or a problem for art? *Revista de Psihologie*, 1, 488-502.

Andronikof-Sanglade, A. (1995) Interpretation and the Response Process. *Rorschachiana* 20, pp.49-63.

Aronow, E., Reznikoff, M. (1976) *Rorschach Content Interpretation*. New York, Grune and Stratton.

Aronow, E., Reznikoff, M., Moreland, K.L. (1995) The Rorschach Technique or Psychometric Test? *Journal of Personality Assessment*, 64 (2), 213-228.

Beck, S.J. (1937) *Introduction to The Rorschach Method: A Manual of Personality Study*. Menasha, The American Orthopsychiatric Association.

Beck, S.J. (1944) *Rorschach's Test I : Basic Process*. New York : Grune & Stratton.

Beck, S.J. (1945) *Rorschach's Test II : A Variety of Personality Pictures*. New York : Grune & Stratton.

Beck, S.J. (1952) *Rorschach's Test III : Advances in Interpretation*. New York : Grune & Stratton.

Bochner, R., and Halpern, F. (1942) *The Clinical Application of The Rorschach Test*. New York, Grune and Stratton.

Cassirer, E. (1907) *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit*. Berlin : Verlag von Bruno Cassirer. [須田朗・宮武昭・村岡晋一訳 (2000) 認識問題 2 - 1. みすず書房.]

Cassirer, E. (1910) *Substanzbegriff und Funktionsbegriff*. Berlin : Verlag von Bruno Cassirer. (山本義隆訳 (1979) 実体概念と関数概念. みすず書房)

Cassirer, E. (1923, 1925, 1929) *Die Philosophie der symbolischen Formen*. Bd. III. *Phänomenologie der Erkenntnis*. Bruno Cassirer Verlag, Berlin. (生松敬三, 木田元, 村岡晋一訳 (1994, 1997) シンボル形式の哲学:

- 第三卷 [上] 認識の現象学, 第三卷 [下] 認識の現象学. 岩波文庫)
- Churchill, S.D. (2006) Phenomenological analysis : Impression formation during a clinical assessment interview. In Fischer, C.T. eds. (2006) *Qualitative Research Methods for Psychologists : Introduction through Empirical Studies*. San Diego : Academic Press, pp.79-110.
- Cronbach, L.J. (1948) A validation design for qualitative studies of personality, *Journal of Consulting Psychology*, 12, 365-374.
- Cronbach, L.J. (1949) Statistical methods applied to Rorschach scores: A review. *Psychological Bulletin*, 46, 393-429.
- Cronbach, L.J. (1950) Studies of the group Rorschach in relation to success in the college of the University of Chicago. *Journal of Educational Psychology*, 41, 65-82.
- Cronbach, L.J. (1955) Review of the book *Developments in the Rorschach Technique*. Vol. I : Technique and Theory. *Journal of Educational Psychology*, 46, 121-123.
- Dilthey, W.C.L. (1900) *Die Entstehung der Hermeneutik*. (久野昭訳 (1981) *解釈学の成立*. 以文社)
- Ellenberger, H.F. (1956) The Life and Work of Herman Rorschach (1884-1922) . *Bulletin of the Menninger Clinic*, 18(5), 173-219. (中井久夫訳 (1999) *ヘルマン・ロールシャッハの生涯と仕事*. エランベルジェ著作集1, みすず書房, pp.3-82)
- Exner, J.E. (1974) *The Rorschach : A comprehensive system : Vol 1*. New York : Wiley.
- Exner, J.E., Armbruster, G., and Mittman, B. (1978) The Rorschach response process. *Journal of Personality Assessment*, 42(1), 27-38.
- Exner, J.E. (1986) *The Rorschach : A comprehensive system : Vol 1. Basic Foundations* (2<sup>nd</sup> ed.). New York : Wiley.
- Exner, J.E. (1991) *The Rorschach : A comprehensive system : Vol 2. Interpretation* (2<sup>nd</sup> ed.) . New York : Wiley.
- Exner, J.E. (1992) Some Comments on "A Conceptual Critique of the EA : es Comparison in the Comprehensive Rorschach System". *Psychological Assessment*, 4(3), 297-300.
- Exner, J.E. (1994) Rorschach and the study of the individual. *Rorschachiana* 19. pp.7-23.
- Exner, J.E. (1996) Critical bits and the Rorschach response process. *Journal of Personality Assessment*, 67(3), 464-477.
- Exner, J.E. (2000) *A primer for Rorschach Interpretation*. Exner Associate. (中村紀子, 野田昌道訳 (2002) *ロールシャッハの解釈*. 金剛出版)
- Exner, J.E. (2001) *A Rorschach Workbook for the Comprehensive System*. Asheville : Rorschach Workshops. [中村紀子・西尾博行・津川律子監訳 (2003) *ロールシャッハ・テストワークブック*. 金剛出版.]
- Finn, S.E. (1996) *Manual for Using the MMPI-2 as a Therapeutic Intervention*. University of Minnesota Press, Minneapolis. (田澤安弘, 酒木保訳 (2007) *MMPIで学ぶ 心理査定フィードバック面接マニュアル*. 金剛出版)
- Finn, S.E. & Tonsager, M.E. (1997) Information-gathering and therapeutic models of assessment : Complementary paradigms. *Psychological Assessment*, 9(4), 374-385.
- Finn, S.E. (2007) *In Our Client's Shoes: Theory and Techniques of Therapeutic Assessment*. Hillsdale, NJ:Lawrence Erlbaum.
- Gibson, J.J. (1956) The non-projective aspects of the Rorschach experiment: IV. The Rorschach blots considered as pictures. *Journal of Social Psychology*, 44, 203-206.
- Gibson J.J. (1971) The information available in pictures. *Leonardo, International Journal of the Contemporary Artist*, 4, 27-35.
- Gibson, J.J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin Company, Boston. (古崎敬, 古崎愛子, 辻敬一郎, 村瀬旻訳 (1985) *生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る*. サイエンス社)
- Gibson, J.J. (1980) Foreword: A prefatory essay on the perception of surfaces versus the perception of markings on a surface. In: Hagen, M. A. eds. (1980) *The Perception of Pictures*. Vol.I. Academic Press, New York, pp. xi - xviii.
- Gibson J.J. (1982) *Reasons for Realism*. Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale. 境敦

- 史, 河野哲也訳 (2004) 直接知覚論の根拠. 勁草書房, pp.255-262.
- Giorgi, A. (1997) The theory, practice, and evaluation of the phenomenological method as a qualitative research procedure. *Journal of Phenomenological Psychology*, 28(2), 235-260.
- Gold J.M. (1987) The role of verbalization in the Rorschach response process: A review. *Journal of Personality Assessment*, 51(4), 489-505.
- Goldfried, M.R., Stricker, G., and Weiner I.B. (1971) *Rorschach Handbook of Clinical and Research Application*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Greene, R.L. (1991) *The MMPI-2/MMPI: An Interpretive Manual*. Boston, Allyn and Bacon.
- Hanson, N.R. (1958) *Patterns of Discovery*. Cambridge: Cambridge University Press. [村上陽一郎訳 (1986) 科学的発見のパターン. 講談社学術文庫.]
- 堀見太郎, 辻悟, 長坂五朗, 浜中薫香 (1958) 阪大スケール. In 戸川行男編 (1958) *ロールシャッハ・テスト (I)*. 中山書店, pp.144-196.
- Holtzman, W.H., Thorpe, J.S., Swartz, J.D., and Herron, E.W. (1961) *Inkblot Perception and Personality*. Austin, University of Texas Press.
- Ivanouw, J. (2000) The Rorschach comprehensive system scoring conceptualized by a phenomenological metalanguage. *Rorschachiana*, Volume 24, pp.127-149.
- 片口安史 (1956) *心理診断法*. 牧書店.
- 片口安史 (1987) *改訂新心理診断法—ロールシャッハ・テストの解説と研究*. 金子書房.
- 木村敏 (2001a) 木村敏著作集 7: *臨床哲学論文集*. 弘文堂.
- 木村敏 (2005) *関係としての自己*. みすず書房.
- Kleiger, J.H. (1992a) A Conceptual Critique of the EA: es Comparison in the Comprehensive Rorschach System. *Psychological Assessment*, 4(3), 288-296.
- Kleiger, J.H. (1992b) A Response to Exner's comments on "A Conceptual Critique of the EA: es Comparison in the Comprehensive Rorschach System." *Psychological Assessment*, 4(3), 301-302.
- Kleiger, J.H., and Peebles-Kleiger, J. (1993) Toward a conceptual understanding of the deviant response in the Comprehensive Rorschach System. *J. Pers. Assess.*, 60:74-90.
- Kleiger, J.H. (1997) Rorschach shading responses: From a printer's error to an integrated psychoanalytic paradigm. *Journal of Personality Assessment*, 69:342-364.
- Kleiger, J.H. (1999) *Disordered Thinking and the Rorschach*. Hillsdale, NJ: Analytic Press.
- Klopfer, B., & Kelley, D.M. (1942) *The Rorschach Technique: A Manual for a Projective Method of Personality Diagnosis*. New York: Harcourt Brace & World.
- Klopfer B., Ainsworth M.D., Klopfer W. G., and Holt R.R. (1954) *Developments in the Rorschach Technique Volume I: Technique and Theory*. Harcourt Brace Jovanovich, New York.
- Klopfer, B. eds (1956) *Developments in Rorschach Technique Vol.2. Fields of Application*, Harcourt Brace Jovanovich, New York.
- Klopfer, B. eds (1970) *Developments in Rorschach Technique Vol.3. Aspects of Personality Structure*, Harcourt Brace Jovanovich, New York.
- Klopfer, B., and Davidson, H.H. (1962) *The Rorschach Technique—An introductory Manual*. Harcourt, Brace & World, Inc., New York.
- 児玉省 (1958) 日本女子大式: 日本人のロールシャッハ反応の基準. In 戸川行男編 (1958) *ロールシャッハ・テスト (I)*. 中山書店, pp.223-270.
- Kohut, H. (1978) Introspection, empathy, and psychoanalysis. In P.H. Ornstein (eds.), *The Search for the Self: Selected writings of Heinz Kohut: 1950-1978*. New York: International Universities Press, pp.205-232.
- Kuhn, T.S. (1970) *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago University Press. (中山茂訳 (1971) *科学革命の構造*. みすず書房)
- Leichtman, M. (1996) *The Rorschach: A Developmental Perspective*. The Analytic Press, Hillsdale.
- Lerner, P.M. (1996) The Interpretive Process in Rorschach Testing. *Journal of Personality Assessment*, 67(3), 494-500.

- Linder, R.M. (1950) The Content Analysis of the Rorschach Protocol. In Abt, L.E., and Bellak, L. eds (1950) Projective Psychology: Clinical Approaches to the Total Personality. New York, Alfred Knopf, pp.75-90.
- Malmgren, H. (2000) Rorschach's Idea of a "Movement" Response in the Light of Recent Philosophy and Psychology of Perception. Rorschachiana, Volume 24, pp.1-27.
- Mayman, M. (1964) Some general propositions implicit in the clinical application of psychological tests. Unpublished manuscript, Topeka, KS : The Menninger Foundation.
- Merleau-Ponty, M. (1988) Merleau-Ponty á la Sorbonne : résumé de cours 1949-1952. Cynara. (木田元, 鯨岡峻訳 (1992) 言語と意識の獲得. みすず書房)
- Meyer, G.I. (1992) Response frequency problems in the Rorschach : Clinical and research implications with suggestions for the future. Journal of Personality Assessment, 58, 231-244.
- 村上英治, 江見桂俊, 植元行男, 秋谷たつ子, 西尾明, 後藤聡 (1959) ロールシャッハ反応の標準化に関する研究: カード特性の分析. ロールシャッハ研究, 2, 39-85.
- 村上陽一郎 (1989) 現代科学論の名著. 中公新書.
- 村上宣寛, 村上千恵子 (1988) なぞときロールシャッハ: ロールシャッハ・システムの案内と展望. 学芸図書.
- 村上宣寛, 村上千恵子 (1992) コンピュータ心理診断法—自動診断システムへの招待. 日本文化科学社.
- 中井久夫 (1990) 治療文化論—精神医学的再構築の試み. 岩波書店.
- 野家啓一 (1993a) 科学の解釈学. 新曜社. (2007年にちくま学芸文庫より増補版あり)
- 野家啓一 (2001) 解説: 「臨床哲学」としての精神病理学. In: 木村敏 (2001) 木村敏著作集7: 臨床哲学論文集. 弘文堂, pp.436-451.
- 岡田強 (1930) ロールシャッハ氏の所謂『精神診断学』の実験的考察, 第1回報告, 第2回報告. 神経学雑誌, 32(5), 361-373; 32(6), 433-441.
- 岡田強 (1932) ロールシャッハ氏の精神診断学に於ける反応の質的分類本法による供述異常の分析, 上, 中, 下. 神経学雑誌, 35(2), 147-190; 35(3), 249-265; 35(4), 336-356.
- Phillips, L., and Smith, J.G. (1953) Rorschach Interpretation: Advanced Technique. New York, Grune and Stratton.
- Phillips, L. (1992) A letter from Leslie Phillips. SPA Exchange, 2, 4.
- Piotrowski, Z.A. (1957) Perceptanalysis: A Fundamentally Reworked, Expanded, and Systematized Rorschach Method. New York, Macmillan Company.
- Poincaré, H. (1902) La Science et l'hypothèse. (河野伊三郎訳 (1983) 科学と仮説. 岩波文庫)
- Quine, W.V. (1953) From a Logical Point of View. New York: Harvard University Press. (中山浩二郎, 持丸悦朗訳 (1972) 論理学的観点から: 9つの論理・哲学的小論. 岩波書店)
- Rapaport, D., Gill, M., and Schafer, R. (1945) Diagnostic Psychological Testing I. Year Book Publishers, Chicago.
- Rapaport, D., Gill, M., and Schafer, R. (1946) Diagnostic Psychological Testing II. Year Book Publishers, Chicago.
- Rickert, H. (1898年) Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft. (佐竹哲雄, 豊川昇訳 (1939) 文化科学と自然科学. 岩波文庫)
- Rogers, C.R. (1951) Client-Centered Therapy. Boston, Houghton Mifflin Company. (保坂亨, 諸富祥彦, 末武康弘訳 (2005) クライアント中心療法. 岩崎学術出版)
- Rorschach, H. (1921) Psychodiagnostik. Bircher, Bern. (鈴木睦夫訳 (1998) 新・完訳 精神診断学. 金子書房.)
- Rorty, R. (1979) Philosophy and the Mirror of Nature. Princeton. (野家啓一訳 (1993) 哲学と自然の鏡. 産業図書)
- Ryle, G. (1949) The Concept of Mind. Hutchinson, London. (坂本百大, 宮下治子, 服部裕幸訳 (1987) 心の概念. みすず書房)
- Schachtel, E. (1966) Experimental Foundations of Rorschach's test. New York : Basic Books.
- Schafer, R. (1954) Psychoanalytic Interpretation in Rorschach Testing. Harcourt Brace Jovanovich, New York.
- Smith, B.L. (1991) Theoretical Matrix of Interpretation. Rorschachiana, 17, 73-77.
- Smith, B.L. (1993) Psychological Tests Don't Think : An Appreciation of Schafer's Psychoanalytic Interpretation In Rorschach Testing. Journal of Personality Assessment,

- 61(3), 596-606.
- Smith, B.L. (1994) Object Relations Theory and the Integration of Empirical and Psychoanalytic Approaches to Rorschach Interpretation. *Rorschachiana*, Volume 19, pp.61-77.
- Smith, B.L. (1997) White Bird: Flight from the Terror of Empty Space. In Meloy, J.R., Acklin, M.W., Gacono, C.B., Murray, J.F., and Peterson, C.A. (eds.) *Contemporary Rorschach Interpretation*, Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Mahwah, pp.191-215.
- Smith, B.L. (2005) The Observer Observed : Discussion of Articles by Evans, Finn, Handler, and Lerner. *Journal of Personality Assessment*, 84(1), 33-36.
- Sugarman, A. (1991) Where's the Beef ? : Putting Personality Back Into Personality Assessment. *Journal of Personality Assessment*, 56(1), 130-144.
- Taft, J. (1958) *Otto Rank: Biographical Study Based on Notebooks, Letters, Collected Writings, Therapeutic Achievements and Personal Associations*. New York, Julian Press.
- 辻 悟, 藤井久和, 林正延 (1963) 基礎形態レベル判定基準について. *ロールシャッハ研究*, 6, 147-181.
- Weiner, I.B. (1975) *Principles of Psychotherapy*. New York, Wiley.
- Weiner, I.B. (1994) The Rorschach Inkblot Method (RIM) Is Not a Test : Implications for Theory and Practice. *Journal of Personality Assessment*, 62(3), 498-504.
- Weiner, I.B. (1995) *Speaking Rorschach : Let Not Theory Come Between Us*. *Rorschachiana*, Volume 20, pp.1-7.
- Weiner, I.B. (1998) *Principles of Rorschach Interpretation*. Lawrence Erlbaum Associates. (秋谷たつ子, 秋本倫子訳 (2005) *ロールシャッハ解釈の諸原則*. みすず書房.)
- Weizsäcker, V.v. (1988) *Der kranke Mensch - Ein Einführung in die Medizinische Anthropologie*. Gesammelte Schriften IX, Suhrkamp, Frankfurt am Main. (木村敏訳 (2000) *病いと人—医学的人間学入門*. 新曜社.)
- Werner, H., and Kaplan, B. (1984) *Symbol Formation - An Organismic-Developmental Approach to Language and Expression of Thought*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc. Hillsdale, Originally published, 1963.
- Windelband, W. (1894) *Geschichte und Naturwissenschaft*. (篠田英雄訳 (1929) *歴史と自然科学*. 岩波文庫.)
- Wittgenstein, L. (1953) *Philosophische Untersuchungen*. Basil Blackwell, Oxford. (藤本隆志訳 (1976) *ウィットゲンシュタイン全集8 哲学探究*. 大修館書店.) あるいは (黒崎宏訳・解説 (1997) 『*哲学的探究*』読解. 産業図書.)
- Wood, J.M. Nezworski, M.T. Lilienfeld, S.O. and Garb, H.N. (2003) *What's Wrong with the Rorschach?—Science Confronts the Controversial Inkblot Test*. John Wiley & Sons, New York.
- Zubin, J. Eron, L.D. Schumer, F. (1965) *An Experimental Approach to Projective Techniques*. John Wiley & Sons, New York.

[Abstract]

## Raising Questions about the Current Rorschach Methodology (Part 2 of 2)

Yasuhiro TAZAWA

This article examines methodological issues in the current Rorschach test to suggest a new direction for the future. The examination is made mainly from the following three perspectives: (1) response process, (2) interpretative process, and (3) differences between quantitative and qualitative analyses. The examination shows that the current Rorschach test is totally influenced by logical positivism. The response process of the Rorschach test — even if the system is claimed to be phenomenological — has been theorized by presupposing sense-datum theory as an element. From now on, we would need overall response process theory or comprehensive field theory that approaches the lived experiences of perceivers. The interpretative process of the Rorschach test has been dominated by one-sided interpreter-centered information gathering models that are grounded in natural scientific experiments and observations. From now on, we would need therapeutic models based on humanistic interaction. The current Rorschach test unconcernedly mixes nomothetic and idiographic methodologies. However, these completely different paradigms are incommensurable. That is, it is difficult to integrate them or to use them together, keeping them equidistant. We should be aware that results from quantitative and qualitative analyses cannot be easily unified.

